

語彙概念構造の観点から見た韓国語の使役・受動構文

桐原自然・堀江薫

東北大学大学院国際文化研究科

kiri@babi.insc.tohoku.ac.jp・khorie@intcul.tohoku.ac.jp

1 はじめに

使役文、受動文の両構文で同一の動詞形態を用いるという現象は、様々な言語で観察される現象である (Washio 1993、鷲尾 1997)。例えば、英語の動詞 *have* を用いた構文や、フランス語の動詞 *faire* を用いた構文などがこの場合に該当するが、この現象は韓国語においても見られる。韓国語の場合、固有語動詞^{注1}の語幹に動詞形態素 {-i-, -hi-, -li-, -ki-} (以下 I 形と呼ぶ) を付加させることによって使役文、受動文を形成する^{注2}。

- (1) 使役文: Minca-nun chinkwu-eykey chayk-ul
ミンジャ-題目 友人-与格 本-対格
ilk-i-ess-ta.
読む-i-過去-陳述
「ミンジャは友人に本を読ませた」

- (2) 受動文: Swuni-nun tongsayng-eykey meli-lul
スニ-題目 弟-対格 髪-対格
kkakk-ki-ess-ta.
切る-ki-過去-陳述
「スニは弟に髪を切られた」

Washio(1993) は、Jackendoff(1990) によって提示されている "Action Tier"、"Thematic Tier" という2つの意味役割の階層を設定し、語彙概念構造の観点から I 形、have、faire などの使役/受動動詞が担う意味構造を提唱している。

本研究では、Washio(1993) によって提唱された枠組みに基づいて、「~un/nun + ~eykey + ~ul/lul」^{注3}の統語構造をとる韓国語の I 形使役文、及び I 形受動文が、どのような意味構造を担うのかを検証していく。そして、I 形使役文と I 形受動文の間に存在する意味的連続性を示す。

また、韓国語の使役文、受動文には、I 形以外にも、「動詞語幹 + key ha-」の形式をとる使役文 (以下 key ha-使役文と呼ぶ) と、「動詞語幹 + 連用形 + ci-」の形式をとる受動文 (以下 ci-受動文と呼ぶ) が存在する。本研究では、統語的な動詞形態である key ha-使役文、ci-受動文も併せて検証し、語彙的な動詞形態である I 形使役文、I 形受動文と比較し、各々の動詞形態がどのような意味構造を担うのかという点を明らかにする。

2. 本研究における理論的枠組み

Jackendoff(1990)では、動詞による名詞句へ意味役割の付与が2つの層 (tier) においてなされることが提唱されている (Jackendoff 1990: 125-126)。1つは、Theme、Goal、

Source などのように、主にものの動きや位置関係を表す意味役割の tier、"Thematic Tier" である。もう1つは、何らかの影響を及ぼしたということを表す意味役割 (Actor など) と、何らかの影響を受けたということを表す意味役割 (Patient、Undergoer など) の tier、"Action Tier" である。

Washio(1993) は Action Tier、Thematic Tier の概念を用いて、以下の faire 構文 (3a) の意味構造を以下の (3b)、(3c) のように示している。faire 構文 (3a) は、使役文及び受動文の両者の解釈が可能であり、Washio(1993) によると、使役文と解釈した場合の意味構造は (3b)、受動文と解釈した場合の意味構造は (3c) のようになるという ((3a)、(3b) の表示における "CS" は CAUSE、"AFF" は AFFECT の略)。

- (3) a. Jean a fait broyer sa voiture par un camion.
「ジェーンはトラックに彼の車をつぶさせた/つぶされた」
b. - CS ([α], [CRUSHED ([β])])
CS([γ], - AFF([TRUCK]², [CAR]³)
- AFF([JEAN]¹, -)
c. - CS ([α], [CRUSHED ([β])])
- AFF([TRUCK]², [CAR]³)
- AFF([β], [JEAN])

(Washio 1993: 70, 76)

(3b)、(3c) の "CS ([α], [CRUSHED ([β])])" は、「トラックが車をつぶした」というイベントを表す Thematic Tier を表しており、「AFF([TRUCK]², [CAR]³)」は、「トラック」から「車」への影響関係を表す Action Tier を表している。また、(3b) においては "CS([γ], [...])" のような Thematic Tier が表されているが、これは、「ジェーン」が「トラックが車をつぶした」というイベントをひき起こす誘発者として解釈されていることを表す。(3b) の Action Tier は、Thematic Tier "CS([γ], [...])" を反映して、「AFF([JEAN]¹, -)」のように表される。

一方 (3c) では、「ジェーン」がイベント「トラックが車をつぶした」の影響を受けたという解釈がなされるため、Action Tier は "AFF([β], [JEAN])" のように表される。ところで、Action Tier の第1項には「車」を表す変数 [β] を配置させているが、その理由は、「車」と「ジェーン」との間に「語用論的關係」(pragmatic relation) が存在するためである。語用論的關係とは、Washio(1993) によって提示されている概念であり、「車」と「ジェーン」との間に存在する所有関係などのように、Thematic Tier では表されない影響関係のことである。faire 構文 (3a) が受動文として成立するためには、「車」と「ジェーン」との間に、所有関係が存在していなければならない、という制約が存在する。Washio(1993) は、Action Tier において "AFF([β], [JEAN])" のように表記することによって、このような制約を明示的に表せるとしている。

Washio(1993) は、以上の faire 構文の分析を通じ、I 形、faire、have のような使役/受動動詞の意味特性を、以下の (4) のように示している。

注1: 固有語動詞とは、「漢語+hata (する)」の形式をとる動詞と異なり、韓国語固有の動詞のことである (塚本・鄭 1993)。日本語で例えると、「感動する」「勉強する」などの漢字サ変動詞に対する「走る」「食べる」等の和語動詞をさす。

注2: -i-, -hi-, -li-, -ki- のいずれを用いるかは、動詞の語幹の末音によって選択される。

注3: 以下、「~un/nun」、「~eykey」、「~ul/lul」の形式をとる名詞を、それぞれ「主語名詞」、「与格名詞」、「対格名詞」と呼ぶ

- (4)
$$\left[\begin{array}{c} \text{.....} \\ \text{AFF}([Y], [Z]) \\ \text{AFF}([X]) \end{array} \right] \quad (\text{Washio 1993: 83})$$

(4) の Action Tier "AFF([X])" の [X] に Actor の意味役割が付与される場合は、従属イベントをひき起こす誘発者として解釈され、(3b) のような使役へと拡張 (expand) される。一方、[X] と [Z] との間に語用論的關係が存在し、[X] に Patient、Undergoer のような意味役割が付与される場合は、(3c) のような受動へと拡張される。

本節では、Washio(1993) によって提唱された、使役文、受動文の意味構造の枠組みを概観した。3節では、Washio(1993) の枠組みに基づいて韓国語の使役文、受動文を分析していく。

3. 分析

本節では、韓国語の使役文、受動文の意味構造を具体的に分析し、意味構造の観点から、複数のタイプに分類されることを明らかにしていく。また、I 形、-key ha-、ci- の各形態が、どのような意味構造を担っているのかを示す。

3. 1 使役文

I 形使役文 (5a) の意味構造を、Washio(1993) の枠組みに基づいて表記すると (5b) のようになる。

- (5) a. sensayngnim-un haksayng-eykey

先生-題目 学生-与格

chayk-ul ilk-hi-ess-ta.

本-対格 読む-hi-過去-陳述

「先生は学生に本を読ませた」

- b.
$$\left[\begin{array}{c} \text{READ}([\beta], [\gamma]) \\ \text{CS}([\alpha], \left[\begin{array}{c} \text{AFF}([\text{STUDENT}]^{\beta}, [\text{BOOK}]^{\gamma}) \\ \text{AFF}([\text{TEACHER}]^{\alpha}, [\beta]) \end{array} \right]) \end{array} \right]$$

使役文 (5a) で描かれている事態を具体的に説明すると、次のようになる。まず、「学生が本を読む」というイベントを発生させるために「先生」から「学生」に対し、(命令や許可などのような) 何らかの働きかけがなされている。続いて、「学生」が「本を読む」というイベントを通じて「学生」から「本」に対して働きかけがなされている。つまり、(5a) では (6) のような流れで因果関係が生じていることがわかる。

- (6) 先生 → 学生 → 本

(6) を踏まえて (5b) をより詳しく示すと、以下の (7) のようになる。

- (7)
$$\left[\begin{array}{c} \text{READ}([\beta], [\gamma]) \\ \text{CS}([\alpha], \left[\begin{array}{c} \text{AFF}([\text{STUDENT}]^{\beta}, [\text{BOOK}]^{\gamma}) \\ \text{AFF}([\text{TEACHER}]^{\alpha}, [\beta]) \end{array} \right]) \end{array} \right]$$

意味構造 (7) が (5b) と異なる点は、Action Tier における "AFF([TEACHER]^α, γ)" を "AFF([TEACHER]^α, [β])" のように修正した点である。つまり、"AFF([TEACHER]^α, [β])" は、使役文 (5a) で描かれている「先生」から「学生」に対する因果関係を意味している。

続いては以下の使役文 (8) を検証してみる。

- (8) Minswu-nun chinkwu-eykey os-ul

ミンス-主題 友達-与格 服-対格

ip-hi-ess-ta.

着る-hi-過去-陳述

「ミンスは友達に服を着せた」

- (8) で描かれているのは、「ミンス」が自分の所有物である

「服」を「友人」の身体に覆う、といったようなことである。このような事態を踏まえると、「友人」は「服を着る」という行為を行なう Actor の意味役割が付与されず、最初に「ミンス」から「服」への働きかけが行われ、その影響が「友人」に及ぶという解釈が妥当である。従って、使役文 (8) で描かれている因果関係は以下の (9) のように描くことが可能である。

- (9) ミンス → 服 → 友人

(9) を踏まえると、使役文 (8) の意味構造は以下の (10) のように示される。

- (10)
$$\left[\begin{array}{c} \text{GO}([\gamma], [\text{TO}[\text{IN}[\beta]]]) \\ \text{CS}([\alpha], \left[\begin{array}{c} \text{AFF}([\text{CLOTH}]^{\beta}, [\text{FRIEND}]^{\gamma}) \\ \text{AFF}([\text{MINSWU}]^{\alpha}, [\beta]) \end{array} \right]) \end{array} \right]$$

(10) は、Washio(1993) の使役文の枠組みと大きく異なる。与格名詞「友人」には、Actor の意味役割が付与されず、「服」から影響を受ける立場にあるので、「AFF([CLOTH]^β, [FRIEND]^γ)" のように示される。また、「ミンス」と「服」が因果関係の上で結びつきがあるので、「AFF([MINSWU]^α, [β])" のように示される。

ところで、I 形使役で表される対格名詞に再帰代名詞 "caki" を付与した場合、その caki の先行詞は主語名詞のみが該当し、与格名詞が先行詞になることはないという指摘がある (Shibatani 1973, Lee 1998)。使役文 (8) の対格名詞に caki を付与した場合、以下の (11) のように、確かに caki が指し示すのは、主語名詞の「ミンス」のみであり、与格名詞「友人」という解釈は成り立たない。

- (11) Minswu₁-nun chinkwu₂-ey₂ y₂ caki₁ y₂

ミンス-主題 友人-与格 自分

os-ul ip-hi-ess-ta.

服-対格 着る-hi-過去-陳述

「ミンスは友人に自分 (ミンス) の服を着せた」

しかし、使役文 (5a) の対格名詞に caki を付与した場合、必ずしも Shibatani(1973) らが指摘するような結果にはならない。以下の (12) のように、caki の先行詞は主語名詞「先生」の場合と、与格名詞「学生」の場合の2通りが成り立つ。

- (12) sensayngnim₁-un haksayng₂-ey₂key caki_{1/2}

先生-題目 学生-与格 自分

chayk-ul ilk-hi-ess-ta.

本-対格 読む-hi-過去-陳述

「先生は学生に自分 (先生 or 学生) の本を読ませた」

本研究では、(11) と (12) の間に見られる、再帰代名詞の用法の違いを、意味構造の観点から説明できると考える。

使役文 (8) は (9) で示したように、主語名詞「ミンス」→ 対格名詞「服」→ 与格名詞「友人」という因果関係を表している。つまり、(8) は「ミンス」から「友人」に向けての「服」の移動を表しており、この場合、「服」の所有者は「ミンス」であるほうが自然である。従って、再帰代名詞の先行詞が主語名詞の場合のみを認め、与格名詞の場合を認めないという解釈が成立するのである。

一方、使役文 (5a) は、主語名詞「先生」→ 与格名詞「学生」→ 対格名詞「本」という因果関係を表している。つまり、「先生」は「学生」に命令、許可などを与える立場にあり、「先生」と「本」の間に直接的な因果関係は存在しない。従って、対格名詞「本」の所有者が主語名詞「先生」でない場合であっても自然な解釈が成立し、再帰代名詞の先行詞が与格名詞「学生」であるという解釈が可能となる。

ところで、先ほどの使役文 (11) を、I 形ではなく、-key ha- を用いて表した場合、以下の (13) のように与格名詞を先行詞とした解釈が可能である。

- (13) Minswu-j-nun chinkwu-eykey cak-i;
 ミンス-主語 友人-与格 自分
 os-ul ip-key ha-ess-ta.
 服-対格 着る-key ha-過去-陳述

「ミンスは友人に自分 (ミンス or 友人) の服を着させた」
 使役文 (13) では、先ほど検証した I 形使役文 (5a) と同様に、主語名詞「ミンス」が与格名詞「友人」に対し、「友人が服を着る」という行為を命令、もしくは許可する立場にあり、主語名詞と対格名詞の間に直接的な因果関係が存在しないといった事態が描かれている。つまり、以下の (14) のような因果関係が描かれていると考えられる。

(14) ミンス → 友人 → 服
 この点から、-key ha- 使役文 (13) の意味構造は、先ほど見た I 形使役文 (5a) と同じような意味構造を表すものと考えられ、以下の (15) のように表される。

- (15) — — GO([γ], [TO[IN[β]]]]) — —
 CS([α], — AFF([FRIEND]², [CLOTH]⁷) —)
 — AFF([MINSWU]², [β]) —

従って、I 形使役文と -key ha- 使役文が担う意味構造は、与格名詞に Actor を付与するかしないかという点で異なってくるといえる。

3. 2 受動文

I 形受動文 (16a) を、Washio(1993) の枠組みで示すと、以下の (16b) のようになる。

- (16) a. Yongho-nun Minca-eykey pal-ul
 ヨンホ-主語 ミンジャ-与格 足-対格
 palp-hi-ess-ta.
 踏む-hi-過去-陳述
 「ヨンホはミンジャに足を踏まれた」
 b. — — CS([β], GO([FOOT-OF-[β]], ON[TO[γ]])) — —
 — AFF([MINCA]², [FOOT]⁷) — —
 — AFF([γ], [YONGHO]²) — —

受動文 (16a) における対格名詞「足」と、主語名詞「ヨンホ」の間には、「部分-全体」といった、語用論的關係で結ばれている。この点を踏まえ、(16b) における Action Tier は、「AFF([MINCA]², [FOOT]⁷)」のように表される。

李(1979) は、(16a) のような受動文を「もちぬしの受身」と呼んでおり、韓国語のもちぬしの受身は、以下の (17) のような条件を満たす場合に成立すると提示している。(17) は、李(1979: 28) で述べられている内容を筆者がまとめたものである。

- (17) a. 所有物である対格名詞が、所有者である主語名詞の身体の一部、身につけている衣服など、空間的に不離の関係にある場合
 b. 空間的に不離の関係になくても、常に他者の所有物を動作の対象とする動詞が用いられている場合

受動文 (16a) の主語名詞「ヨンホ」と対格名詞「足」は、不離の関係にあるので、(17a) の条件を満たしているといえる。

一方、以下の受動文 (18) は、空間的に不離の関係にはないが、用いられている動詞「ppayas-ta」「奪う」が、常に他者の所有物 (ここでは「ayin」「恋人」) を動作の対象とするので、(17b) の条件を満たし、受動文として成立する。

- (18) Chelswu-nun chinkwu-eykey ayin-ul
 チョルス-主語 友人-与格 恋人-対格
 ppayas-ki-ess-ta.
 奪う-ki-過去-陳述
 「チョルスは友人に恋人を奪われた」

また、以下の受動文 (19) は、空間的に不離の関係にはなく、用いられている動詞「ccac-ta」「破る」は、必ずしも他者の所有物を動作の対象にとるとは限らない。ccac-ta「破る」は、例えば「自分の論文」を破る場合にも用いられるからである。従って、(17a)、(17b) のうちのどちらも満たさないで、受動文として成立しない。

- (19) *Sensayngnum-un atul-eykey selywu-ul
 先生-主語 息子-与格 書類-対格
 ccac-ki-ess-ta.
 破る-ki-過去-陳述
 「先生は息子に書類を破られた」

しかし、以下の受動文は、(17a)、(17b) を満たしていないにもかかわらず、受動文として成立する。

- (20) Minca-nun Yongho-eykey mos-ul
 ミンジャ-主語 ヨンホ-与格 釘-対格
 pak-hi-ess-ta.
 打ち込む-hi-過去-陳述
 「ミンジャはヨンホに釘を打ち込まれた」

(20) は、対格名詞「釘」と主語名詞「ミンジャ」は空間的に不離の関係にないばかりではなく、所有関係にもない。また、用いられている動詞「pak-ta」「打ち込む」の動作の対象「釘」は、他者の所有物というわけでもない。それにも関わらず、(20) が受動文として成立するのはなぜであろうか。本研究では、今まで見てきた受動文に加え、(20) のような受動文の成立要因が、意味構造の観点から説明可能であることを主張する。

(20) の意味構造を示すと、以下の (21) のようになる。

- (21) — — CS([β], [GO([γ], TO[IN[α]])]) — —
 — AFF([YONGHO]², [NAIL]⁷) — —
 — AFF([γ], [MINCA]²) — —

「釘」は、打ち込むという行為によって実現される移動の主体を表しており、Thematic Tier において Theme の意味役割が与えられている。一方、「ミンジャ」は打ち込まれる目標点であるので、Goal の意味役割が与えられている。また、(21) における Action Tier 「AFF([γ], [MINCA]²)」は、Thematic Tier において表されている「移動物の接近」という事態を反映した影響関係を表しており、受動文 (16a) の意味構造における Action Tier とは異なり、語用論的關係を表しているわけではない。

以下に示す、受動文 (18) の意味構造 (22) も、同様の説明が可能である。

- (22) — — — FROM[α] — — —
 CS([β], [GO_{pcss}([γ], — TO[β] —)]²⁴)
 — AFF([FRIEND]², [SWEETHEART]⁷) — —
 — AFF([γ], [CHELSWU]²) — —

動詞「ppayas-ta」「奪う」は、「チョルス」から「友人」への所有権の移動を表す動詞であり、Thematic Tier では、「恋人」に Theme、「チョルス」に Source の意味役割が与えられている。つまり、(22) の Action Tier 「AFF([γ], [CHELSWU]²)」は、単純に所有関係のような語用論的關係を表しているというよりは、Thematic Tier において示されている「所有権の剥奪」という事態を反映した影響関係を表しているといえる。

注4: 「[GO_{pcss}(.....)]」は所有権の移動を表す。

ところで、ci-受動文は、以下の(23)のように「主語名詞+与格名詞+対格名詞」の統語構造をとらない。

(23) *Minswu-nun emeni-eykey ton-ul
 ミンス-題目 母親-与格 お金-対格
 cwu-e ci-ess-ta.
 渡す-連用形 ci-過去-陳述
 「ミンスは母親にお金を渡された」

ci-を用いた構文が受動文として成立する場合、以下の(24)のように、与格名詞の動作の対象が主語名詞として表される。

(24) Cemwon-un kangto-eykey cwuki-e ci-ess-ta.
 店員-題目 強盗-与格 殺す-連用形 ci-過去-陳述
 「店員は強盗に殺された」

本研究で見てきたI形受動文の場合、主語名詞はAction Tierにおいて対格名詞と何らかの影響関係で結ばれる立場であった。そのため、動作主である与格名詞とは直接的な因果関係で結ばれる必要がなかったわけであるが、ci-受動文の場合、主語名詞は動作主である与格名詞の動作の対象として、与格名詞と直接的な因果関係で結ばれていないとならない。従って、ci-受動文(24)の意味構造におけるAction Tierでは、以下の(25)のように主語名詞「店員」と与格名詞「強盗」の影響関係のみが表される。

(25) -CS([α], ([β], DEAD))
 -AFF([BURGLAR]², [CLERK]⁴)

与格名詞によって引き起こされたイベントと主語名詞との関与性という観点からI形受動文とci-受動文の比較を行うと、I形受動文のほうがci-受動文よりも間接的であることが分かった。

3.3 まとめ

本研究では、韓国語の使役文、受動文を検証してきたが、その結果、次のようなことが明らかになった。

まず、I形使役文は、用いられる動詞によって、与格名詞にActorの意味役割を付与する場合と付与しない場合の2通りが存在し、それが使役文の意味構造の違いに反映される。また、Actorの意味役割を付与しないI形使役文を、-key ha-使役文で表すと、与格名詞にはActorの意味役割が与えられる。

次に、I形受動文では、主語名詞と対格名詞がThematic TierにおいてThemeとGoal、ThemeとSourceのような関係で結ばれる場合、語用論的關係は受動文成立のための必須条件ではない。一方、主語名詞と対格名詞の間にThemeとGoal、ThemeとSourceのような関係が存在しない場合、主語名詞と対格名詞との間に、不離の所有関係のような語用論的關係が受動文成立のための必須条件となる。この場合、Action Tierで示される主語名詞と対格名詞の影響関係は、語用論的關係を反映したものである。

また、I形受動文とci-受動文を比較した場合、次のようなことがいえる。I形受動文における主語名詞は、与格名詞である動作主によって実現されるイベントに対し、より間接的な関与が許されるが、ci-受動文における主語名詞は、直接的な関与のみが認められる。

本研究で検証してきた使役文、受動文は、以下の図1のような意味領域を形成する。図1に見られるように、使役文、受動文の意味領域の間には、Washio(1993)によって提唱された意味構造が介在し、I形使役文とI形受動文の意味的な連続性を形成している。また、I形使役文と-key ha-使役文、I形受動文とci-受動文の各々が担う意味領域も、図1で見られるような分布を示している。

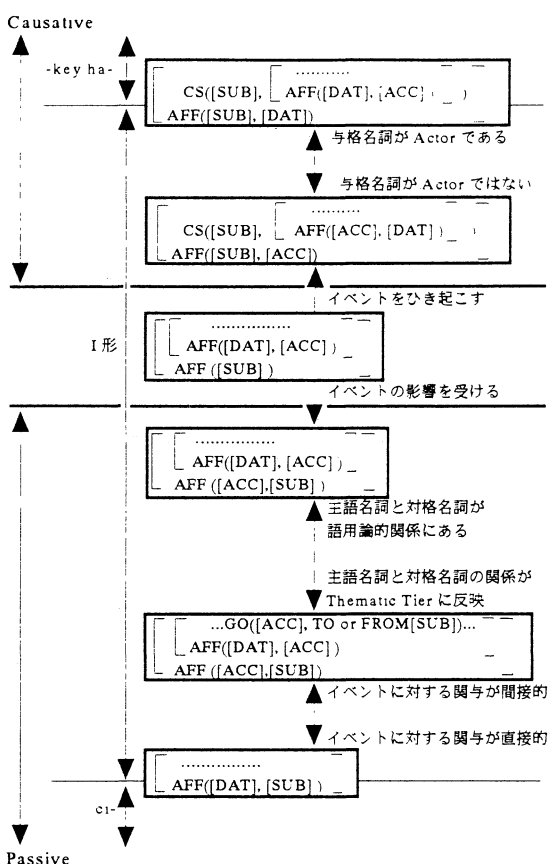


図1: 韓国語の使役文、受動文の意味構造領域

※図の[SUB], [DAT], [ACC]は、それぞれ主語名詞、与格名詞、対格名詞を示す

4. おわりに

本研究では、韓国語の使役文、受動文を、Washio(1993)で用いられているAction Tier、Thematic Tierの概念を用いて、様々な意味構造のタイプに分類した。その結果、I形使役文、I形受動文の間に見られる意味的な連続性や、I形使役文と-key ha-使役文、I形受動文とci-受動文の間に見られる意味構造の領域分布が明らかになった。

謝辞

第一著者(桐原)に対するご指導、ご支援をいただいた佐藤滋東北大教授に感謝申し上げます。

参考文献

- 李文子, 1979. 「朝鮮語の受身と日本語の受身「その1」-「もちぬしの受身」を中心に-」『朝鮮学報』第91輯, 15-31.
 鷲尾龍一, 1997. 「他動性とヴォイスの体系」『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』1-106. 研究社.
 Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
 Shibatani, Masayoshi. 1973. "Lexical versus periphrastic causatives in Korean". *Journal of Linguistics* 9: 281-297.
 Washio, Ryuichi. 1993. "When causative means passive: a cross-linguistic perspective". *Journal of East Asian Linguistics* 2: 45-90.